

記憶をつなぐ

港湾局臨海事業部赤レンガ倉庫等担当

中尾 光夫

YES'89を体験したのは、小学校六年生の時だった。「宇宙と子供たち」というテーマのもと開催されたその博覧会は、当時まだ横浜に越してきたばかりであった自分にとって、横浜のイメージを形成するあまりにも大きな体験となった。「ここはすごいまちだ」と、単純に、だが強烈にそう思った。私にとつて、最初の横浜の記憶である。それから私は、このみなとみらい21地区を訪れるたび、えもいわれぬ「わくわく感」に襲われるようになった。梅干しを見ると睡があふれるような感覚だ。何気ない都市の風景も、記憶と結びつくことで、大きな力を持

つものである。

あれから約十年経った現在、みなとみらい21地区は、横浜の顔となり、多くの来街者を誇るまちへと成長してきた。そのみなとみらい21新港地区に立地するのが、赤レンガ倉庫である。明治期に建設されたこの歴史的建造物を保存・活用するのが、私の所属する担当の仕事である。近代的な建物が建ち並ぶみなとみらい21地区にあつて、一種独特な雰囲気醸し出しているレンガ造りの二棟の倉庫は、構造補強や外壁等の改修が終了し、内部活用のための工事を待っているところである。

一般的に、建築の保存・修復は新築よりはるかに難しく、コストもかかる。しかし、歴史的な建築やそれらが作り出す風景には、何物にも代え難い、人々の記憶が刻まれており、それ自体が人々の心そのものである。赤レンガ倉庫についてはどうか。赤レンガ倉庫は、レンガ造りという独特の表情に加え、映画やドラマなど様々なメディアの影響により、多くの市民に親しまれてきた建物である。そのため、様々な思いと共に、横浜の記憶として強く心に刻まれているようである。そういった市民の様々な思い、願いはどこを向いているのか。それを敏感に感じ、意識しながら計画に携わつ

ていく必要がある。

都市の記憶として人々の心に刻まれるのは、建築だけではなく。様々な祭りやイベントも強く心に刻まれるものである。東京の表参道を毎年十二月に彩っていた銀杏並木のイルミネーションが、一昨年を最後に終了したのだが、それまでの思い出が記憶と共に消えてしまうような寂しい思いがしたのは、私だけではないだろう。様々な事情があつての終了であろうが、何か記憶をつなぐ方法がなかったのだろうか。

昨年九月、新港地区は街開きを迎えた。人気のない「ただの工事現場」であつた地域から、人があふれ、賑わう「生きたまち」へと生まれ変わった瞬間だった。赤レンガ倉庫も平成十四年のオープンを控えている。これからこの地区では、様々な場面が人々の記憶に刻まれていくことであろう。そしてその記憶は、横浜という都市の記憶としてストックされ、その他多くの記憶とつなぎ合わされることで、次第に街に対する愛情へと醸成していく。このような過程を演出するために、自分に何ができるか。日々考えながら、職務に取り組んでいくつもりである。

あとがき

調査課では、毎年、市民意識調査を行っている。昨年度調査では、「今の生活に満足している」と答えた人の割合は、長期的に上昇傾向の中で七三・八％に達しており、国民生活選好度調査（経済企画庁）の結果が、下降傾向の中の四四・二％なのと対照がある。また、横浜のイメージを「良い」と感じる人の割合は九一・七％と非常に高い。

しかし、この結果に油断はできないだろう。他都市から転居して間もない市民、市境近くに住む市民からは「横浜はイメージ先行」という評価ももれ聞こえてくるのである。

今後、地方分権の本格化と情報公開の進展によって、税や市民サービスなど都市の様々な差が顕在化し、住民がその差を比較することが容易になる。

しかし、サービスの提供のためには、財源が必要で、つまりは市内経済が活発でなければならぬ。二十一世紀、果たして横浜は、選択される魅力と経済力を備えているこ

とが可能だろうか。これが、今回の特集テーマ設定の理由であった。

ハマっ子気質についてふれるときの「開港以来の進取の気性」というフレーズは、今、雑誌でもよく見かける。もしかしら、市が発信元だったのかもしれない。しかし、個人的には、そんな気概のある市内企業は、最近では、ごく少数だと感じている。時代の転換点と言われる現在、企業（今後の起業も含む）、そして職員の私たちも、もう一度この気持ちを取り戻す必要があるのではないだろうか。

△平野V

お詫びと訂正
調査季報一四一「自治体における合意形成」三ページ家田仁氏の経歴に誤りがありました。ここに謹んでお詫びすると同時に訂正致します。
(誤)日本国有鉄道、東日本旅客鉄道勤務を経て昭和六十二年から東京大学へ。
(正)日本国有鉄道を経て昭和五十九年から東京大学へ。

●第139号(一九九九年九月)

特集・「コンパクトシティ」考

1 コンパクト・シティ原論 倉田直道

2 座談会・横浜市と「コンパクトシティ」

—— 内海宏・加川浩・小玉亮子・浜野四郎・南学

3 成熟都市のまちづくり戦略

①分権時代の都市経営とコンパクトシティの背景 土井一成

②新たな国土計画と横浜の戦略的都市づくり 八幡準

4 コンパクト化へ向けたまちづくり

①コンパクトシティと交通機関 佐藤正治

②中心市街地の活性化と商店街からタウンセンターへ 秋元康幸・小沢朗・長谷川創

③生活福祉と住まいまちづくりとコンパクトタウンから考える 岡田朋子・続橋宏昭・宮里辰男・宮澤好

④都市自然との共生とコンパクトシティ 桐原隆・倉知秀朗・細河功・田並静・藤井毅

⑤地域特性に対応した事業のあり方とコミュニティ総合補助金と個性ある区づくり推進費から考える 大木節裕・竹前大

⑥コンパクトシティと情報ネットワークにおける共通要素 山口健太郎

自主研究レポート／横浜市の都市計画マスタープランと都市づくりの「視点」の重層化に関して 小西真樹・武井伊織・鴛田傑・斎藤直子

自主研究レポート／H.Cスケッチと地域における健康づくりの拠点の姿を考える 飛鳥田充・松本まり・齋藤春恵・今市尚子

調査&政策研究／ユニバーサルデザインの推進と施策研究会レポート ユニバーサルデザイン推進プロジェクト

新戦力／生まれる選択肢 清水嘗

●第140号(一九九九年十二月)

特集・多様化する教育環境と社会

1 子育て・学校教育を取り巻く現状と今後の方向性 汐見裕幸

2 教育改革とその変革の視点 寺脇研

3 子どもの教育環境とその変化への対応 ①子どもたちの今と青少年基本調査より 渋谷和生

②データで見る学校教育 教育委員会事務局総務部企画課

③変わる教育観と「ゆめはま教育プラン」 「まち」とともに歩む学校づくり 西角英之

4 家庭・学校・地域の連携への取組み ①「ひらかれた学校・大岡」の取組みと子ども、家庭・地域、教職員で創る新しい学校の姿 斉藤一弥

②まちと共に歩み自分が輝くクラブ活動と子どもの存在を最優先する学校づくり 佐々木孝

③緑園都市スクールふれあいネットと地域イントラネットの活用 松浦淳

5 多様化する教育環境 ①多様化する教育対応システムと横浜の先駆性とその後を踏まえて 永田實

②私立中高一貫校の表現 本間勇人

6 座談会・教育が変わり、社会が変わる 丹羽健夫・浅井経子・浜野克彦・岡本勝利・南学

自主研究レポート／市民の目から見た区役所窓口サービスのあり方とその改善と都筑区窓口サービスプロジェクト 中村聰ほか

新鮮力／21世紀・横浜開化 喜多麻子

●第141号(二〇〇〇年三月)

特集・自治体における合意形成とまちづくりの視点を中心に

1 鼎談・なぜ、合意形成かその時代背景とあり方 家田仁・卯月盛夫・金田孝之

2 都市施設と合意形成 ①ドキュメンタリー・住民参加の道路づくり 山本文雄・浜野四郎・杉山正義

②計画レベルの住民参加の一考察 山本文雄

③施設建設計画のあり方と説明責任 北部方面斎場建設事業 編集部

3 地域施設の建設・運営と合意形成 ①神奈川リサイクルコミュニティセンター 市民参加による施設整備から事業運営へ 松山弘子・赤荻道子・川口宏・宮川雄三

②使える洋館・体験できる洋館「山手234番館」 大野裕子・五島哲夫

③コミュニティ施設の利用と合意形成と神大寺地区センターと神奈川区区民利用施設協会の取組 牧野迪代・深沢啓子

④新治市民の森の愛護会づくり 地権者と利用者の合意形成 田並静

⑤重症心身障害者の通所施設「朋」の運営とまち地域資源としての障害者施設 編集部

4 合意形成を支える地域運営のしくみ ①行政と地域活動団体との新たな関係づくり 保土ヶ谷区地域・まちづくり活動支援事業 鈴木隆

②区による新たなまちづくりと都市計画マスタープラン・区プランの策定を契機として 武井伊織・鴛田傑・斎藤直子・小西真樹

③身近な地域社会の合意形成の土壌を耕す 坂田弘太郎・大野木秀子・白川修己・村上佳江・加藤隆章・小林康夫・関口昌幸

5 横浜市における様々な合意形成 新鮮力／横浜の元気を受け継いで 山本有紀子 編集部

調査季報

142

2000年6月

編集・発行

横浜市企画局政策部調査課

〒231-0017横浜市中区港町1-1

TEL.045-671-2029

2000年 6月 30日発行

横浜市広報印刷物登録

第120139号

類別・分類A-BA011

デザイン サウスピア

印刷 株式会社ガリバー

ISSN0387-8899

この印刷物は再生紙（古紙混入率70%）を使用しています